

# 新岡垣風土記

第437回

## 岡垣の炭鉱①

### — 明治期の炭鉱 —

岡垣町の東部地域には、明治から昭和にかけて中小の規模の炭鉱（坑）が存在していた。

「福岡県地理全誌（遠賀郡）」は、1873（明治6）年から2年をかけて調査されたものであるが、岡垣には鉾山として石炭礦場が戸切に2カ所、野間に1カ所あったことが記されている。

江戸から明治になり、新政府は鉾山に対する政策を進め、「鉾山心得書」を1872（明治5）年に発布して、鉾物の所有権・採掘権を政府に属することとした。翌年には、鉾山心得書の趣旨を取り込んだ「日本坑法」が発布され、明治期前半の鉾山政策の詳細が規定された。

日本坑法は、「試掘を経て炭坑を開坑するための借区を出願する者に対して、地主は拒否することはできない」と規定した。これによ

岡垣歴史文化研究会 石田 健次

り、岡垣にも多くの借区が出願されることになったと思われる。1883（明治16）年末時点の岡垣での借区は15カ所を数えており、戸切に14カ所、野間に1カ所あった。

1895（明治28）年から1912（明治45）年までの岡垣における炭坑の操業状況は、1899（明治32）年が10坑と最も多く、翌年以降は1〜2坑に減少して推移している。ほとんどが小規模炭坑であり、開坑はしたものの操業を継続できなかったことが分かる。

「筑豊炭鉱誌」には、1897（明治30）年当時の岡垣にあった炭坑として、日の出炭坑と新立炭坑が掲載されている。これらは、いずれも戸切にあった炭坑である。

#### ●日の出炭坑

借区の坪数は5万3600坪で、1890（明治23）年3月に

開坑したが、当時、石炭商況が不振であったため操業を一旦中止した。その後、1895（明治28）年に再開し、翌年に初めて出炭した。しかし同年11月、出水による排水処理に困難を極めたため、休山となっている。

#### ●新立炭坑

借区の坪数は2万6030坪で、1894（明治27）年に開坑した。出炭高は1日5万斤である。坑夫は100人で、その多くが夫婦である。機械類はほとんどなく、すべて人力によっている。採掘した石炭の運搬は、坑口から九州鉄道遠賀川駅までは木道を敷設して車力により運んでいる。遠賀川駅からは、鉄道で門司の新立炭坑出張所まで送って販売の取り扱いをし

ている。

1912（明治45）年7月時点の岡垣の借区数は、戸切、野間、黒山、山田の各地域に23認可されている。しかし、実際に開坑し操業した炭坑は、戸切にあった第二川島炭坑、海老津炭坑、柳谷炭坑と野間にあった野間炭坑の4坑のみであった。

明治期の炭坑では、頭領と呼ばれる人々が重要な役割を果たしていた。炭坑主が炭鉱経営に精通していない場合には、頭領が炭坑主に代わって採炭事業のすべてを請け負っていた。

この時期の炭坑は、納屋制度と呼ばれる特殊な労働制度のもとにあり、頭領自らが坑夫を雇い支配していた。

1902（明治35）年に刊行された「筑豊炭業頭領伝」によって、戸切炭坑や日の出炭坑で頭領をしていた人たちの名前が分かる。

頭領の多くは、同じ炭坑に長く留まるということはなく、中にはその技術・経験を生かして炭坑主になった者もいた。

つづく



▶岡垣町にあった炭鉱分布図（岡垣町史より）